
天才でイケメンでハーレム野郎な勇者と平凡で不幸で卑怯な親友で主人公(仮)

籠の中の鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天才でイケメンでハーレム野郎な勇者と平凡で不幸で卑怯な親友で主人公（仮）

【Nコード】

N8443L

【作者名】

籠の中の鳥

【あらすじ】

俺は『いつものよう』に神社にお参りに来た、今日こそはいい日であるように！俺に幸福という名の一日を！！・・・最低でも平凡な一日を！！くれよ！！・・・が、その期待はむなしく消え去り、トラブルメーカーなあいつと一緒に異世界に・・・神よ・・・そこにいるなら殴り殺したい・・・

て言うか、（仮）ってなんだよ！！俺は主人公だろ！！・・・え？

作者！？そんな冷たい目で見ないでくれえええ！！！！

20000PV突破！！5000ユーニーク突破！！

ブログ あいつと一緒に異世界へ・・・

どうもはじめまして！俺の名前は幾月翔^{イクンキカケル}、高校1年生、16歳だ！

今俺は神社の賽銭箱前にいる、え？なぜこんなところにいるかって？
いや、普通わかるだろ？お参りだよお参り！・・・は？なんでお参りしてるかって？それも簡単、それは・・・

パンパン！！

「今日こそは、今日こそは！平和で平凡で裕福な一日に・・・」

ふう、お参りも済んだしさつさと学校行く・・・

「あ！お～～い！カ～～ケ～～ル～～！！」

・・・あ～～あ～～、聞こえない聞こえない、

「無視するな～～！カ～～ケ～～ル～～！！」

あ～～も～～！うつさいな！！今度は何…を！？

さつきから翔の名前を呼んでいた男のほうを振りかえると・・・
黒いスーツを身にまとった男たちに追いかけていました、って
！！

「何してくれとんじゃーーーー！！！！！」

俺は悲痛な叫びとともにその男と一緒に逃げ始める

紹介が遅れたが、さつきから俺の名前を呼んでいる奴の名前は、月^{ツキ}
森^{モリ}真^{マコト}だ、

こいつはイケメンで天才で運動神経もよくて・・・とにかく、ウザ
いくらいすごいやつだ、

今日もどうやら、俺の平凡な一日にはならないようだ・・・

だが、俺は知らなかった、今日はいつにもまして不幸な一日である
ことを・・・
ましてや、この世界と別れを告げるとは・・・

ブログ あいつと一緒に異世界へ・・・（後書き）

どうも！はじめまして作者です！！

今回初投稿・・・いわば処女作なので至らないところもあるかもしれませんが、

温かい目で見守ってくると恐縮です！！

投稿スピードも不定期ですが、頑張らせてもらいます！！

第一話 さらば地球

時は変わり放課後・・・

「っ、付き合ってください!!」

「・・・ごめんな、いきなりは無理かな、友達からならいいけど!」

はぁ、今日何回目の告白だっけ・・・えっと、六回目だっけ?
まったく! いい加減にしてほしいよ!!

え? 告白されてうれしくないのかって?

いやうれしいよ? けどさ、告白されていたのは俺じゃねーし!

真だよ! 告白されてんのは真だよ!!

なんでおれの眼前で告白してんだよ!! しかもなぜ俺を睨む!? 俺のせいなのか!!?

そんなこんなで告白していた女性は去って行った。

「あのさ～～マコト？」

「なんだよカケル？」

俺たちは家への近道である裏路地を歩いていた、帰り道が同じでか
らなあいつと・・・イケメン死ね！！

まあ、それはさておき、

「朝のあれは…なんなんだ？」

今やっと聞けました、昼とかはいろいろあつたしね・・・

え？何があつたかつて？女子に追いかけてました！

いや～～もてるっていいね～～

すみません間違いです、マコト様の近くいるなどが、死ね！！とか
言われてました～～

俺泣かないよ！こんなの日常茶判事だし・・・

「ん？あ～～あれね！実はコソコソと白い粉とお金を交換してた人
たちがいてさ～～、何やってんのって言ったら追いかけられた。」

・・・麻薬取引現場かよ！！見れば分かんたる普通！！何やってん
だよおまえは！！

ん？今度はなんだよ・・・あいつらどうやってまいたって？

答えはいたって簡単、マコトが木刀片手に突っ込んでいって、全滅させました、そのあとあいつらは警察に連行されて行きました、

いや～～あれは見てて面白かったよ、あいつらブワッて空中に浮かんだからね～～愉快愉快・・・

「なあ、カケル？」

「なんだよ～～イケメン～～？」

「あれなんだ？」

あん？皮肉言つたのに無視かよ、いつもなら俺はイケメンじゃないっていうの・・・に？

「・・・見た感じ・・・魔法陣・・・じゃね？」

うん、魔法陣が地面にある、青く光ってるし・・・

「うわっ！なんだこれ！吸い込まれる！！？」

ズズズ、とイケメンが魔法陣に引つ張られるというシュールな光景を俺は見た、

そして俺は・・・無視して帰るということにした。

「おい！！カケル！帰るなし！！親友だろ！何とかしてくれー！！」

へっ！やなこった！俺は家にさっさと帰って寝たいんだよ！！

「こうなったら・・・」

さ～～て帰る・・・は？？

マコトが俺の脚をつかんでいやがる・・・って！！

「離せバカ！！俺まで巻き込まれるだろーが！！」

「こうなったら道ずれだー！！」

ちょー！待て！！話せばわかる！！話せば・・・

こうして、地球から二人の存在が・・・消えた。

第一話　さらば地球（後書き）

最新遅いですかね？まだ始めたばかりだからよくわからないし…
キャラ説明は、もう少し後になりそうです、あとでいろいろあること
になっているので・・・ それではまた・・・ ああ！そうそう、
小説のアドバイスくれるとうれしいので、気付いたことがあればド
シドシください！！

第二話 異世界・・・？こいつはどんだけ俺を巻き込めば・・・

俺は今、不思議な空間に浮かんでいる、

色がぐちゃぐちゃに混ざり合い、いきなり暗くなっただと思うと目がチカチカする位の光になったり、とにかく、シツチャカメツチャカな空間に俺はいた。

だが、そんな場所から一筋の光が・・・

そして・・・地面が見えた

「ぬわぁー!!」

「よっと・・・」

俺はバランスを崩して転び、マコトはきれいに着地する・・・運動神経の違いが見えるね・・・うん、

まあ、そんなことは今はいい、まずはこの状況の・・・

「ようこそいらっしやいました勇者様!!」

・・・整理しなければ、この先やっていけそうにないな・・・

はい！まず一つに、目の前に白衣服・・・シスター？っぽいのがいる、

みた感じこいつが俺たちを呼んだのかな？

次に二つ目、この部屋の周りには中世ヨーロッパ風の鎧を着た兵士がいる

まあ、兵士さんかな・・・？てかなんで兵士がいるんだ？

次に三つ目、この部屋は見た感じ、儀式場・・・だな、そんな感じがする部屋である、

ついでに、俺たちの足元にはあの忌まわしき魔法陣がある、光ってはないが

結論！俺たちは何らかの儀式により、周りの兵士が見守る中このシスターさんが俺たち（主にマコト）を何らかの理由で召還した・・・

とはいえ、これは俺の中での解釈であり、これが答えであることは・

・

「あなたをここに呼んだのはほかでもありません・・・この世界を・・・救ってくださいませんか？」

・・・いやな予想って結構当たるんだよね・・・畜生！！

そう思いながら俺は体勢を立て直そうとすると・・・

「・・・あれ？私は一人しか呼んでないのですが？」

あ~~~~、ハイハイそりゃそうそうだ、俺というイレギュラーがいるのは不自然だよね~~~~

ああ、世界には絶望するな・・・

「へ？ここはいつたい・・・カケル！ここどこだ！！」

「だー！ー！！うつさいバカ！今俺はこの場の打開策を・・・」

ピーン！カケルはこの場の打開策を生み出すことに成功した！

「これはこれは巫女様！お初にお目にかかります、私はカケルというものです、そして隣におりますは 頭脳明細、運動能力抜群、姿かたちも最高であるマコトというものであります！

実際に巫女様が呼んだのはこのマコトですが、私も人の子である前にマコトの親友でありまして急に消えてしまった親友を追

つてきてしまったしまつです、真に申し訳ありません！！

つきましては、『勇者』マコトこそが巫女様が呼んだのであり、私はまったくもっての部外者であります。なので、できれば元の世界に戻してくだされば幸いです。」

フ、フハハハハ！！言つてやったぜ！！これだけいえば十分だろう！！

ん？どうしたマコト！？そんなぽかんとした顔は！！？意見面が台無しだぜ！？バーーーーカ！！

「な、なるほど、そういうわけでしたか、でも、すみません！私は召還ができるだけで元の世界に戻すことはできません、それに、この世界にそんなことができる人は今のところいません。」

・・・世の中って残酷だね・・・

ま、まあ、あれだけ言ったことだしは俺は何もしなくても大丈夫！！・・・なはず！！

「・・・カーーーールーーーー！！」

「ん？なんですか？『勇者』マコト？」

俺は皮肉めいてこれを言ったことは裏目に出してしまった、

「分けてわからんこと言つてんじゃねー！！」

「うぎゃ~~~~!!ギブ!ギブ!!ギ・・・」

マコトは絞め技を繰り出した!カケルは気絶してしまった・・・

「ふう!すつきりした・・・てかなんだよこの世界!」

「マコトさまとカケル・・・様にはちゃんと説明しないといけませんかね・・・うっ!」

そういつて倒れそうになる白い服を着た女のひと、危ない!!

ガシッ!!

「大丈夫ですか!!?」

ボンッ!!

「へっ!?ひゃい!たいひょうひてす!!」

どうやらそれとも回らないらしい、ほんとに大丈夫かな?

顔も赤いし・・・風邪でも引かなきゃいいけど、

「・・・ハッ！このおふた方をいったんお部屋に連れて行ってください、

状況の整理も必要でしょうし・・・」

そういつて俺の手から離れた女のはきびきびと兵士？たちに命令を出して、

俺たち（カケルは担がれていたが）はこの不思議な部屋を後にした・
・

こうして、俺たちの運命の歯車が・・・動き始めた・・・

というか、巫女さん・・・一瞬俺に『様』つけるの忘れていたですよ！！

どんだけマコトにブローケンハート（意味不）されてんだよ！！

・・・と俺は気絶しかけの精神の中でそんな事を思っていた、

第二話 異世界・・・？こいつはどんだけ俺を巻き込めば・・・（後書き）

投稿が遅れた理由は肺炎かかってました（笑
今度からは週一には書けるように心がけます。

第三話 これは夢落ちだった・・・ってことになんないかな〜

ん？なんだここは・・・ああそうか、俺確かマコトの絞め技で気絶したんだっけ・・・

そしてここは・・・

「ん？カケル？やつと起きたか、クリスさんずつとおまえが起きるの待ってたんだぜ。」

・・・夢落ちってことにはならなかったか、はあ、また面倒なことになると思つと憂鬱だなー

「やつと起きたのですか？・・・一生寝てればいいのに（ボソ）」

ん？今聞き捨てならないことを言つたような・・・気のせいだよな、うん

巫女さんの話によればこの世界はやはり俺たちがいた世界とは違う世界・・・異世界のような

この世界の名前は『グロウリー・エターナル』・・・変な名前だな、この世界の住人はグロウリーと呼んでいるらしい、

そして、ここから重要な話になる、

俺たち（主にマコトだけ）が呼ばれた理由は、魔王が現れたかららしい、

この魔王はどうやら三百年に一度・・・定期的に現れるらしい、そしてそれが今年であるらしい、まったくもって不幸である、うん

まあ、簡単な話、魔王倒してこの世界に平和をもたらしてください・・・ということらしい

マコトは・・・ノリノリだな、おい

俺？やる気ねーよ！なんでこんなことに巻き込まれなきゃいけないか、わからない！！

そういえばこの巫女さんの名前は『クリス』というらしい、

なんでも元平民出身らしく、苗字、この世界では家名かな？・・・がないらしい

努力で勝ち取ったみたいだが・・・よくもまあ頑張りますね〜

「この後お二人には国王に会ってもらうことになっております。」

ゲゲ！またもめんどくさいことに・・・

「はい、わかりました！・・・その前に一つ聞きたいのですが・・・」

「ハイ、なんでしょう？カケル・・・様、」

またこの人・・・もういいや・・・

「いや、あのですね、こういつて何なんですが、俺たちはもともと一般人なわけでした・・・魔王なんて倒せるのですか？」

「はい、それは大丈夫なはずですが、この世界に召還するにあたり、身体能力の向上などが上がっているはずですが・・・個人差はありますがね、」

ほえ～～、そこら辺はしっかりしてんだな～～

「他に質問がなければこのまま国王様に会いに行くのですが・・・」

「ああ、じゃあお願いします」

マコトがクリスさんにそう言って、俺らはこの部屋を後にした・・・

「ほお、勇者が二人か・・・これは面白いな、のう、レイよ・・・レイ？」

今俺たちは国王の前にいる、その横にはレイと呼ばれる・・・王女かな？がいたのだが、

これ完璧にマコトに一目惚れしてるよね〜、顔がめっちゃ赤いしね

「・・・ゴホン、とにかくじゃ、勇者が二人というのはうれしい誤算じゃ、二人共・・・この世界を救ってくれるかの？」

「ハイ！」

マコトは正直に返答して、俺は嘘をついた、嘘をつくには理由がある、理由は簡単、この場で『いやです』なんて言うてみる、殺されるだろうね

「うむ！良い返事だ！それではこの者たちに武器を渡さなければ・・・クリスよ、この二人を『勇武の間』へ案内してくれ。」

「わかりました！」

クリスはそう言い、俺たちを『勇武の間』とやらに案内した・・・

「ここが『勇武の間』です！マコト様！！」

あゝこの言い方は、クリスさん、どうやら王女さんの反応でわかったのかな？

対抗意識燃やしてるね完全に、

「この部屋は代々、勇者しか入ることのできない部屋となってます、」

「へー」

ふむ、意外と扉のデザインはなかなかいいな・・・

金と銀の装飾を主として、いかにも威厳のある部屋と思わせる扉である、

「では、私はここまでなので、お二人はどうぞ中へ・・・」

「わかりました、案内ありがとうございます、クリスさん！」

につこりと笑いながら言うイケメン勇者ことマコト、

「そ、そそそ、そんなことはありませんよ！マキョトシヤマ」

うっわ、ベタな反応だなゝゝ

そんなこんなで俺らは『勇武の間』の中へと・・・入った、

武器とかあるみたいだが・・・何を選ぼうかな・・・

第三話 これは夢落ちだった・・・ってことになんないかな～（後書き）

最新遅いでしょうか？

やはり週に2回くらい上げないとダメかな…

て言つか明日からテスト期間です・・・

勉強したくないな～

それではまた次回、お会いしましょう、

第四話 俺の武器には夢や希望がつまって・・・いると信じよう

「こゝ、ここが勇武の間だよな？」

「俺に聞くな、俺に！」

巫女さんの言われた通りならばここは勇武の間で合ってるのだから・・・

汚な！！なんだよこれ！なんで床に武器が散乱しまくってるんだよ！！

一つ一つ立てかけてあったりとかさあ、あるだろーもっと・・・

「とにかく探してみる？」

「それしかないだろな」

まあ、とにかく各自自分に見合った武器を探すこととなった・・・

【30分後】

「ん？これなんかいいんじゃないか？」

マコトはそう言い一本の剣・・・白い刀身の剣を掲げた、あのタイプの剣は片手、両手ともに使用可能な武器のようだ

マコトは数度素振りをして・・・

「よし！これに決めた！使いやすいし！」

マコトがそういった瞬間、ぐらりと倒れた、

・・・あえてスルーした、

「さーで、俺もさっさと決めないとな〜」

「いてて・・・」

マコトは痛そうに額を抑えた、顔面から倒れたようだ・・・ザマア！

「おれ・・・この剣の中にいた」

「はあ？」

ついには頭もいかれてしまったようだ、アーメン

「いやさ、さっきこの剣の・・・世界？かな、そこでこの剣の中に人がいて・・・それで」

あ~~~~、見えてきました、ハイハイハイハイ、結論からして・・・

「そして・・・この剣と【契約】を結んだ・・・」

はい！予想通り！賞品かなんかほしいね、うん

「ま、まあ、俺は一応武器選び終わったから先に外で待ってるぞ、」

「オ~~~~ケ~~~~！」

そういつてマコトは勇武の間からでていった。

さてと、おれもさつさと・・・ん？

・ カケルの足元に一つの・・・いや、二つの【扇子】が落ちていた・・・

・・・【扇子】かぁ・・・

そう思いながらその扇子を拾い上げる、

これは扇子というよりは、戦闘に要いることのできる【鉄扇】のようだ、

ああ、なつかしき思い出が……

いや、回想シーンないからね？

まあ、簡単に説明すると、俺は元の世界で鉄扇とか使って人を気絶させまくってたという話さ、

え？それ犯罪じゃないかって？いや、正当防衛だよ！

だって相手暴力団だよ！？マコトのせいで巻き込まれて戦闘だよ！？

まあ、それは置いといて、なぜ武器が鉄扇かっていうと、

俺の親父が【日本舞踊マニア】だったからである、そして、日本舞踊を愛しすぎて、

『あ！これ戦闘に要入るんだ！よし！さっそく我が息子に……』

といった具合で、教え込まれたのさ、他にも使えるものもあるが今考えることもないな

「……他にめばしいものもないし、仕方ない、これにすっか〜」
と、言つてすぐに自分の意識が……暗闇へと消えた

「……なんじゃこじつ？」

カケルは周りを見渡す、そこにはあの召還されたときと同じように、色がちやごちやで、空間がひん曲がってあつた

『む？客か？珍しいな』

どこからか女性の声が聞こえたと思うと、目の前にいきなりその声の主が現れた、

『お初にお目にかかる、ここに何か用か？』

この女性・・・いや、少女だな・・・この少女は俺に問いかけた、

「何って・・・この鉄扇使いたいと思っただけに・・・」

『ほう！奇妙な輩もいるものだな！？フッフ・・・』

少女はかなり不気味な笑顔をしながらこう言った

『フフ、わかりました・・・ゴホン！・・・汝は我を受け入れた、
その身にわが力を使うこと・・・許可する！・・・それにあたり・・・
・我に名をあたえよ』

・・・は？名前？いやいきなり言われてもさ、

この際適当でいいか？・・・そういえばこの世界って不思議だよな
？・・・ん？

【不思議な世界＋少女Ⅱ？】

・・・わかるよな？

ここは少しカッコよく言ったほうがいいかな？

「我も汝を受け入れよう！この身に汝の力を授かるにしたがい、汝
に名を与える、汝の名は・・・【アリス】」

まあ、あれだよ、不思議の国のアリスだよ・・・伏字意味あるの

か？これ？

『我は何時より名を授かった、我の名は【アリス】、これより汝はわが主と認めこの力を与えん・・・』

すると、自分の周りにどす黒い光が立ち回る、

俺はそれを払おうとせず、それを受け入れる

「ん・・・？戻ったのか？あ、やば、額痛い・・・」

カケルは額を抑えながら周りを見渡す、

そして目的の鉄扇を拾い上げる

『これからよろしく頼みます、主』

いきなり頭のかにアリスの声が響いた。

「・・・これは念話かなんかか？」

『そのとおりです、主は別に声を出さなくても会話できますよ』

ふうん、あのさ、この鉄扇の名前もアリスでいいのか？

『いえ、その鉄扇の名は【佐保姫】といいます、この武器の能力は後で説明します』

サホヒメ
佐保姫か・・・まあいいか、

そういえば、マコト待たせてるんだっけか

「さてと、じゃあさっさとマコトと合流すつか！」

カケルはそういい、勇武の間を後にした・・・

マコトのやるーーー！

なんでメイドさんに囲まれてお話してるんだよ！！

どんだけ人気なんだよ！！おまえは！！

そしてなんでメイドさんたちが俺は一斉に睨むし！！

しかも巫女さんもなんで俺を睨んでんだよ！！

俺はあれか！？やっぱり邪魔なのか！！？

そんなこんなで、夜になり・・・就寝の時間となった・・・

第四話 俺の武器には夢や希望がつまって・・・いると信じよう（後書き）

作者の予定では（水・日）にこの小説を書きたいなと思っておりま
す、

ですが、まだ予定なので、たまに最新がずれるかもしれませんが、
そこら辺は目をつぶってくれると幸いです、

それではまた次回お会いしましょう！

・・・え？テスト？・・・何それ、どんな味がするの？

第五話 VS勇者！！・・・いや、勝てる気がしないんですけど？（前書き）

まず最初に、投稿が遅くなったことを謝罪します、
何かと学校や、肺炎にかかったりしていたので遅くなってしまいました。

今やつと夏休みに突入しましたのでこれからはちゃんと投稿できる
と思います。

それでは本編を楽しんでください・・・

第五話 VS勇者！……いや、勝てる気がしないんですけど？

「おはようカケル！いい天気だな！！」

マコトが俺の部屋の扉を思い切り開けながらいった、
おまえの頭の中のほうがいい天気だと思うんだがな、

「はよっす、」

朝の挨拶を終えるとメイドさんが現れて朝食を持ってきた

……マコトの野郎、ここで一緒に飯食うつもりかよ……

「なあマコト」

「ん？にゃんきゃほうか？」

飯食いながら言うなと心の中で突っ込みながら言った、

「昨日の夜、なんか不自然なことなかったか？」

「え？何ともなかったよ？」

……さすが鈍感、でもここまでとはな

まあ、一言で言うと監視されてたってことだな、天井に二人と扉の

前に一人

俺の勘だとマコトほうには俺の倍行ってる可能性があるな、

「いや、何ともなかったらそれでいい」

こちららいつ殺されるかもしれないプレッシャーでほとんど眠れなかった

たまに聞こえるカチャ、という音にどれだけ戦慄を感じたことか・

・

「ん？それ食わないのか？だったら食っちゃうぞ？」

・・・ん？そつそれは俺が最後に食おうと・・・遅かったか・・・

朝食を終え、国王に呼ばれたので王座に移動した・・・

「うむ、よく来た、ここに呼んだのはほかでもない、お主らの力量を見たいのだが・・・」

もしかして、戦闘フラグっすか！！俺にとっては死亡フラグになりかねないんだけど？

「それはいいですね！私もぜひ勇者様・・・達の世界を見てみたいです！」

姫さんや、俺のこと一瞬忘れてないっすか？

それどころか、ちょうどいい力毛がいるみたいな顔をしないでください、精神的にキツインですが、

「わかりました！カケル！俺たちの力・・・見せてやろうぜ！！」

はあ、この能天気野郎は・・・しかし、ここでの戦いで未来が決められるかもしれん・・・

下手に負けるのも危ないかもしれない、しかたないか、

「ああ、わかったよ・・・」

またも場所が変わり、ここは兵士たちの修練場・・・もとい闘技場についた、

「お二人はここにある武器をお使いしてください、すべて刃は削つてあるので心配しないでください」

そういつて、兵士Aに案内されたところには、武器庫だった

「んじゃ、俺これでいいや」

そういつてマコトがとったものは、先日手に入れた剣と大差ない剣だった、

俺は・・・マコトと同じような剣を持ってみた、

ふむ、やはりな・・・この世界に来てから体が異様に軽いと思っていたが、

これはあれか？召還されたことによって身体能力がある程度上昇してるのか？

だとしたらあいつ・・・マコトはどうなるだろうか、
前の世界でも木刀を振り回しただけで、大の大人がブワッて吹っ飛んだ実力があるわけで・・・

接近戦はほとんど勝ち目はない・・・か、だったら、

俺たちがまず最初に思ったこと、それは・・・

ワアアアアアアアアアアア！！！！！！！！

観客多くね？闘技場いっぱいにもとい兵士やらメイドやらetc.
・
・

「「きゃあ~~~~！！マコトさま~~~~！！こっち向いて~~~~！！」

」

「マコトさま……!!!」

「……主にマコトを応援してるようだが、あえて気にしないことにしよう、」

「では、両者、構えてください」

審判である兵士がそういうと、マコトは剣を構え俺は、

俺もマコトと同じ剣を構えた

「ん？カケル、そんな服だったっけ？」

そう、俺は制服ではなく武器庫にあった服を借りていた、マコトは制服であるが……

俺の服装はラフな服装であるが、この服には隠れた特徴があった、

「へ！そんなこと気にしてると負けるぞ！」

「……それもそうか、よし！全力で来いよカケル！」

全力じゃなきゃあなたの剣を止められるかわかりませんよ……

「それでは……始め!!」

はじまったと同時にマコトは一気に距離を詰めて攻撃してきた、

それに対しておれは・・・自分の剣をマコトに向かって投げつけた、

「んな!!?」

いきなり飛んでくる剣に驚いたマコトは横にローリングしてよけた、
観客席からも、どよめきの声が聞こえた、

「隙だらけだぞ!マコト!!」

俺はマコトの隙を見逃さず・・・服のポケットから短剣を取り出した、

そう、これがこの服の特徴、服に剣を仕込めることだ、
なんでこんな盗賊じみた服があるか疑問に思ったが、ラッキーと思
い着てみた・・・ちょうどよいサイズを見つけてそれを着た、

「まだまだ!!くらえ!!」

その短剣も投げつける、
マコトはそれにも驚いてバックステップでよけるが・・・まだまだ
短剣がある!

「うりゃうりゃうりゃ!!!!」

しかし、だんだん慣れてきたマコトはそれをよけつつ、たまに弾き
つつ俺に接近してきた、

こいつ・・・化け物かよ、

そこからはマコトのターンだった、

ブンブンと剣をふるってくる、短剣で防げそうもなかったので、必死こいてよける

いや、当たったら痛いしね

だが、そう簡単によかれるものではなく、すこしかすり始めた攻撃する暇もねえな、おい・・・だったらこれはどうだ？

そう、お忘れではないか？おれは元の世界では何があるかわからない、

だから、可能な限り俺は武装していた・・・例えばこれだ！！

俺はライターと丸い球を取り出した、丸い球にあった導火線に火をつけた

「げ！おまえそれ！爆弾！！？」

マコトはたじろぎ少し俺に距離をとる

んなわけあるかボケエ！！俺はあれか！？いつでもどこでも爆弾投げられる危ない人か？それだったら俺はもう監獄の中だよ！！

・・・まあ、その球をマコトに投げる、

「ウワアアア・・・あれ、これって煙玉？」

そうだよ！悪いか？でもこれでしばらく大丈夫・・・なんせ、かなりの広範囲に広がる特注の煙玉だからな！

俺にはこの『暗視ゴーグル』があるから見えるぞ・・・俺には見える！！

・・・なぜ暗視ゴーグルあるかって？元の世界で親に作ってもらいました、買うとか高すぎて無理だし

母親が科学者でよかったです、はい

俺はさっきまで投げていた短剣を拾い集める、ついでに最初に投げた剣も、

その剣を拾った直後、目の前に剣が！？

「うわぁ！？」

なぜに？まだ煙玉の効果あるのに・・・

まさか、こいつ・・・音で！？いや、普通は無理だろ普通・・・あいつに常識通じない・・・か、

煙が徐々に晴れだして、いまではもう煙は無くなってしまった、

「ずるいぞー、カケル！！正々堂々戦え！！」

マコトがそういうと会場からもブーイングが・・・

いや、正々堂々戦ったら確実に負けますよ、どっちしろ勝てる気しないけどね

「だったら俺もズルするぞ！！」

そついったマコトは何かをつぶやき始める・・・

あの・・・もしかして・・・あれですか・・・マコトさん・・・
そう、ここは異世界！いろいろなものがあります・・・そ
う『魔法』とか、

「ファイヤーボール!!」

炎の玉・・・いや、もはや砲弾だ!!

「うわぁ!!」

直線的に、かなりの速さで来る炎の砲弾を必死こいてよけた、

・・・と、同時に静寂・・・

そして・・・

「「「きゃあ~~~~!!!!マコトさま~~~~!!!!」

「すごい・・・昨日教えたばかりでここまで・・・」

犯人あんたか巫女さん!!ずるいよそれ!!・・・俺が言えないか、

「へへ!どうだカケル!!・・・ぶっつけでどうなるかわからなか
ったけど・・・」

ぶっつけであれかい!!一瞬ひいじいちゃんの顔が見えたわ!!

ていうか、また魔法使うつもりかよ!!させる・・・

オイオイオイオイ！！もう唱え終わってね？

あれ？もしかして、あれゲームとかで言う・・・『詠唱破棄』？

「ファイヤーウォール！！」

あつっ！！なんだよこれ！！俺とマコトを取り囲むように炎の壁・
・逃げ場ねえじゃん、

「これでやつと正々堂々戦えるな・・・カケル！！」

・・・ここで俺は二つの言葉が頭をよぎった・・・『詰んだな』
『死亡フラグ』

周りの兵士たちとメイドたち、そして貴族たちは炎の壁の向こうで
何が起きているのかをかたずをのんで見守っていた・・・
もちろん巫女さんと姫さん、国王もだ・・・

そして徐々に炎の壁は消えていった、そして、

倒れているカケルに剣を突き付けているマコトの姿が見えた瞬間、
歓声と拍手の渦が生まれた

マコトが剣を頭上に掲げるとさらに大きな歓声と拍手が生まれた

マコトの剣が鈍く光っているのをカケルは悔しながら見ているしかなかった・・・

こうして、二人の戦いに幕が落ちた・・・

カケルは、砂を投げとけばよかったと後悔したのは夜、夢を見ている時だった、

第五話 VS勇者！・・・いや、勝てる気がしないんですけど？（後書き）

やっと書き終えました、今までの中でたぶん一番長いと思いました、戦闘模写が難しいことに痛快しました、

前書きに書きましたが、これからちゃんと最新できると思っているので、頑張って書いていきたいです！！

それではまた次回・・・

第六話 そろそろ逃げるか・・・準備準備つと

この世界『グロウリーエターナル』に来て三日がたった、

先日の二日間はドタバタが多くて時間をあまり感じる事ができなかった

そして今日は勇者をたたえるパーティーだとさ・・・めんどいな～

・・・いつそのことパーティーやってる最中に逃げるか・・・

「おっはよ～！カケル！！」

「・・・はよっす」

相変わらずのテンションのマコトである

つたく、この能天気野郎は・・・

「今日のパーティー楽しみだな！おいしいごちそうがいつぱい出るんだろ！！楽しみだな！！」

「ああ、そうだな～」

まったくもってうるさいやつだな、こいつは

こちらら今逃亡計画考えてるんだから自重しやがれ！

「すまんマコト、俺ちよつと用事あるからここで」

「ん？用事？俺も手伝おうか？」

「いや、それには及ばん、逆に邪魔だ」

「邪魔つて・・・まあいいや、頑張れよ！じゃあまた・・・ああ、俺も力ケルに用事あるんだった」

そういったマコトは俺に一冊の本を手渡してきた

「これは、いわゆる『魔術書』なんだけどさ、俺これ全部中身覚えたから力ケルにあげるよ！」

・・・中身全部つて、こいつ化け物か！

んじゃあれか！？この中にある魔法全部使えるのかよ！

さすがチート野郎・・・としか俺は言えないな

「あんがとな、じゃあ俺行くから」

俺は早急にこいつから去って行つた・・・

用事というのは簡単なものだった、

ただ、兵士さんたちにこの城の見取り図と、町の見取り図をもらうだけだった、

理由を聞かれると俺はこう言い放った

「ここに魔物たちが襲ってくるかもしれませんが、あなたのような屈強な兵士たちがいれば安心でありますが、

もしかしたら後方から責められる可能性もあるかもしれませんが！
そんなときに対処するための方法を自分なりに考えたいので・・・」

それだけ言うと、快く俺に城と町見取り図を渡してくれた

人って少しでもおだてるといい気分になって『少しあやしくても』
引き受けてくれるんだよね〜

なにはともあれ、見取り図ゲット！

後は巡回兵の動きと交代の時間、そしてできれば・・・

まあ、準備としてはこれくらいいいだろう、できればあれも手に入れたかったがぜいたくは言えないか・・・

でもあきらめきれないな・・・よし！あれは脱出するときに奪うことにしよう、

さて、後は夜のパーティーを待つだけだが・・・

まだ時間があるか、よし、暇だしマコトにもらった『魔術書』でも読むか・・・

『我らの住む世界、グロウリー・エターナルではマナというもので満たされている、このマナというものは空気と同じで見ることも直接触することもできないが、マナで満たされている場所ならば植物の成長を促したり、傷を癒すこともできる、

これは人工的に行うこともできる、それが 魔術 である、この魔術には様々な種類があり、そのすべてを知ることとは不可能に近い、マナにも種類があり、火・水・風・雷・地・木・光・闇などのマナがある、このマナは場所により数が異なる、たとえば周りに川が流れているのならば水のマナが、周りに植物があるならば木のマナが多いこととなる、

このことを考えるならば一番数が多いのは火のマナである、その媒体は今も空高く浮かんでいる太陽である、太陽は半日ではあるが出現しているためかなり実用性があるといえる、太陽にはもう一つのマナ、光のマナも放出しているが、残念なことに光の魔術を扱えるものはあまりいない、理由はあまり分かっていない、もうひとつ

闇の魔術もあまり扱える人間はいない、ただし、魔族は例外であるが、

次にマナの合成である、これは高等技術なためこれもまた扱えるものは少ない、だが、これを扱えるのなら素晴らしい魔術師になれるのは簡単である、例えばである、火の魔術に風の魔術でを合わせるとうなるであろう？答えは簡単である、威力が増大し、見るものを燃やしつくすことも簡単である、

水の魔術と木の魔術を合わせるとどうなるだろうか？この効力はいろいろあるが一般的に回復効果が増大したちまち傷をふさぐことができる、他にも例があるがこれは自身の力で見つけるほうがよいだろう、

魔術は奥が深いということが理解できたであろうか？それができたのであればこの本を書いた意味ができて私はうれしいばかりである、また、この本を読み魔術師を目指してくれるのであれば私はまたうれしいばかりである、

それでは、残りのページは私が扱うことができた魔法をすべて書き残すことにした、私の命も残り少ない、弟子をとりたかったが、とることもできずに寝込んでしまった、この本を読んでいる者よ、どうかこの私を笑ってほしい、そして、ここに記されている魔法をすべて覚えてほしい、これが私の最後の願いであろう、

さて、そろそろ眠くなってしまった、魔法のほうは先に書き記しておいたので心配はするな、それではそろそろ書くのをやめるとしよう、これと呼んでいるものよ・・・さらばだ

グレーン』

著者 レイデル・

「・・・前振り長いな、おい」

俺は本を読むときは全部読み切らないといけないという癖がある、

たまに恨めしく思うが、気になって仕方がなくなってしまう、

まあ、それはさておき、さっさと魔術のほうのページを見るか・・・

「ん？もつこんな時間かよ」

半分くらい読み切ったところでパーティーの始まる鐘の音が聞こえてきた

一つ誤解してほしくないことがある、俺はこの本を『読んだ』だけであって、まだ魔術は使えません（キツパリ

ちやちやっと着替えてさっさと行くか・・・

こうして、カケルの計画が始まった！

第六話 そろそろ逃げるか・・・準備準備つと（後書き）

なんか計画とか言ってしまったが、今のところ中身はまったく考えていない自分って・・・

ま、まあ時間もあるし考えておかないと・・・なんとかなさ、きつとー！

まあ、今回はこの辺で、

それでは次回を楽しみにしてください、またねー！

第七話 自由は自分の力で勝ち取るものだ！

「おーい！カケル！パーティーだぞー！早く出てこいよー！」

「んな声出さなくても聞こえてるわ・・・ていうかそこ、俺の部屋じゃないしな」

ドアを叩いていたマコトにカケルが突っ込む、

マコトが叩いていたのはカケルの部屋の反対側部屋のドアであった。

「あれ？そうだったけ？まあいいや、ほら行くぞー！」

マコトが俺の手をとって走り出す・・・

なぜか、視線を感じるがここで気にしたらダメなような気がしたので無視した。

「ではここに、この者が勇者であることを私が証明するー！」

パチパチパチパチパチ・・・

今、国王様がマコトの前でそう宣言し、周りから盛大な拍手が送られた。

俺は今パーティー会場の端っこにいる、

え？俺はって？つつしんでお断りさせてもらいました、

一応、名義としては勇者とはなっているが、

勇者が二人いると国民たちが混乱する恐れがあるため俺のことは伏せられたといったほうがほんのところだと思っがな、

だけどこれはこれで俺も動きやすくなったということだ！

マコトは今、飯に夢中だし今がチャンスだな

「む？カケル殿？こんなところで何をしていらっしやるのですか？
パーティーは？」

俺は今、パーティー会場を抜け出してある廊下にいた、
そこで巡回中の兵士とばったり会ってしまった。

「いやいや、私はこういつた堅苦しいのがきらいでして、抜け出してきました・・・どうですかこれ？」

俺が兵士に差し出したのはワインである、

「いやいやカケル殿、今仕事中ですし・・・」

「ここから一時間くらいここには誰も来ませんから大丈夫ですよ、

ささどつぞ」

パーティー会場から拝借したワイングラスを出しそこにワインを注ぐ
最初こそ嫌がっていた兵士ではあったが、それを見てようやく受け
取った

「では一杯だけ・・・」

兵士がそれを飲もうとしたとき・・・

バチチチチチチ！！！！！！

激しい火花がなり、兵士が倒れた

「油断大敵・・・こんなんでお城守れんのかよ・・・」

カケルの手には・・・スタンガンが握られていた、
これもまた元の世界でカケルが持っていたものである。

「さてと、これをこうして・・・ここに置けば完璧つと」

ワインの中身を半分捨て、倒れた兵士の近くに置いた。

こうすれば誰が見てもわかるであろう、
この兵士は『巡回中にもかかわらずワインを飲んで、拳句寝てしま
った』と、

「こいつがあれを持つてるはずだが・・・あつた！ラッキーじゃね！？」

カケルはそのあと順調？に進み目当ての物を持った兵士を気絶させ、それを手に入れた。

その目当てのものとは・・・カギだった、ただ、普通の鍵ではない、これはこの城の『マスターキー』である。

これがあればどの部屋の鍵で開けることができる。ただ、これを持つてる兵士など数を数えるほどしかないし、それに高い階級の兵士しかもっていない。

いわば、カケルが今気絶させた兵士はけっこう高位の兵士であるという意味だ、

・・・真面目にこの城の警備に疑問を抱き始めた。

こうして、カケルはこの城の隠し通路のあるところまでつくことができた。

「だいたい一時間ちよいかな？まあいいや、さっさと逃げると・・・

」

そこでカケルの動きが止まる、
カケルの目の前にはここには絶対にいてはいけなはずの人間がいた。

「あれ？カケルか？」

・・・マコトであつた、

しかも、この様子だとマコトは『偶然』ここにいたようだ、

強行突破しかないか・・・カケルはそう考えた

「カケルさあ、ここで何してんの？」

「・・・この城から逃げるため、って言ったらどうする？」

正直にカケルはそういった、
質問した本人は・・・

「ふん、いや、快く見送るよ？」

「・・・は？」

カケルはすつとんきような答えに呆れてしまった。

「親友が決めたことだったら俺はそれを見守るさ」

何ともカッコイイ？セリフであるとカケルはそう思った。

カケルは壁際のブロックを押すと壁が横にスライドして通路が出来上がった。

「・・・で、いくのか？」

「まあな、一応言っけど止めても無駄だぞ」

「さつきも言ったる？見送るだけだつて・・・だけどさ」

マコトはいったん言葉を止めて空を見上げた。

空は俺たちがいた世界よりも星がきれいで一瞬見入ってしまうほどだった。

「俺がピンチなと気には助けてくれよな！」

「・・・気が向いたら」

あまりこいつがピンチなところに出くわしたくないが一応そう返事した。

そういったカケルは通路にはいつていった。

しばらくすると壁が元に戻りはじめ、最後にはただの壁になった。

「・・・そっぴやこの世界の金ってなんだっけ？」

根本的なことを忘れていたカケルであった・・・

第七話 自由は自分の力で勝ち取るものだ！（後書き）

かなり微妙になった感が否めない私です、はい
まあ、やりきった感はあるのでこれで何とか・・・

次からは町での話になります。

カケルの武器についてとか・・・仲間とかも・・・ね

それではまた次回お会いしましょう、それでは・・・

第八話 冒険の始めるには金が必要

「ん．．．ふあゝゝゝ」

カケルは目が覚めると、周りを見渡した。

ここはどうやら公園？のようなところのようだ、
この世界のお金を持っていないカケルは宿屋に泊ることはできずに
仕方なくここで夜を明けたようだ。

「首痛った！．．．あゝゝイケメン死ねばいい．．．」

首が痛いのをイケメンのせいにするカケル、
．．．ただ単に寝違えただけでは？

「さてと、さっさと行くかな」

カケルはそういうと鞆からこの町の地図を開いた。

カケルには急ぐ理由があった。

それは昨日行った脱走．．．もとい夜逃げがもとである。

カケルがいなくなったことにより城のほうでは少しあわてているだ
ろう．．．多少は

それで彼らがまず行うのは・・・近辺の搜索である。
そこで見つかるのはかなりヤバいことである。まず何されるかわからないし・・・

なので急がなくてはならないが、なにぶん装備や食料がなくてはならない、

それを買うにはお金が必要だがそれすら持っていない。

となるとまずやらなければならないのは金集めである。

そして、効率よく稼げて、なおかつ自分でもできる仕事となると数も限られてくる。

少しくらいヤバくてもそれは目をつぶるとすると・・・

「はい、ギルドに入団したいのですね、少々お待ちを・・・こちらにお名前を記入してください」

そう、ギルドであつた。ギルドでは入団することにより依頼を受けることができるようになる。

もちろん依頼成功のあかつきにはお金などが支給される。

「・・・はい、カケル様ですね、ではこちらをおつけください」

そういつて受付さんに渡されたのは緑色の指輪であった。
それをカケルは右手の人差指につけた。

「その指輪はランクにより色が異なります、ランクは依頼をこなす
ごとに上がっていきます。」

ランクはEからSまであり、それぞれ緑 青 橙 黄 赤 白と
いう順になっております。」

ランクが上のほうのやつが強いつてことか・・・

「あの、さっそくですが簡単にいっぱい稼げる依頼ないですか？腕
のほうなら少し自信があります」

「はい、腕に自信があるのなら・・・こちらなんてどうでしょう
か、ゴブリン十体討伐、それなりに報酬料は高いです」

ふむ、ゴブリンとは普通の敵だな、俺はてつきりベターなスライム
とかそんな奴らが出ると思ったが、

「あ、じゃあそれや・・・」

「あれ、あなたそれやるの？」

後ろから声が聞こえる・・・だが一瞬、殺気を感じてしまい、短剣
に手をかけてしまった。

「あなた、それ受けるのって聞いているのよ？」

・・・気のせいだったのか、殺気のさの字も見当たらなくなってい
た。

そこにいたのはいかにも魔術師のような格好をした女性だった。

「・・・ああ、そのつもりだ」

「だったら、私も連れてつてくれない？私もそれ受けたんだけどね、なにぶん魔法使い一人では分が悪いからね」

戦力が増えるのは申し分はないが・・・なんだろう、この不安な感じは？

「わかった、俺も戦力が増えるのは喜ばしいことだしな」

「じゃあ決まりね、あたしはイシスよ、よろしくね・・・あなたは？」

「カケルだ、よろしく頼む」

ちらつとイシスの指についている指輪の色を見る・・・緑だった。やはりさっきのは気のせいだったのだろうか？

・・・考えるのめんどくさい、どうでもいいか

ここは妖精の森、ここには童話などに出てきそうな妖精『ピクシー』が普通にいる森である。

この妖精は人間たちとは友好的で危害は加えない、

だが、妖精の中にもゴブリンというものがおり、ゴブリンは人間を敵視しているらしい。

で、今回俺たちは二人分だから二十体倒さなければならない。

だが、ゴブリン達は集団行動するらしいので会えばすぐにでも依頼終了・・・とイシスは言っていた。

・・・ああ、いたねゴブリン、ああいますねゴブリン・・・でもこの状況を理解できないのですが？

カケル達の目の前には・・・ゴブリンが数えきれないほどいて、しかも、巨大なゴブリンまでいた。

「なに、このでっかいの・・・」

「ああ、そいつはキングゴブリンって言って、Bランクくらいの実力ないと倒せないわよ？」

その、王様なゴブリンが今俺たちの目の前にいるのですが・・・

「俺にどうしろとー！ー！ー！ー！」

カケルの悲痛な叫びは森にこだまして消えた・・・

第八話 冒険の始めるには金が必要（後書き）

ゴブリン・・・それは妖精の部類に入る種族である。大きさは人の約半分の大きさで知能はあまりないが、武器や集団での奇襲をすることを考えると幾分かは知能があることが分かる。

基本的に木の实などを食べて生活しているが、人間も食べることがあるため被害が絶えない。

魔物の中で最弱に部類するが、ゴブリンにも種類があり、ゴブリン達を仕切るキングゴブリンはBランクの実力がないと倒すことはできないくらい強いので注意が必要である。

ピクシーは人間と同じで種族で呼ばれるが、ゴブリン達は魔物に分類されている。

最新が遅れてすみませんでした。

実はこれ三回目の投稿です。一、二回目の投稿は・・・失敗してすべて消し炭に・・・OTL

次回、イシスと共闘、イシスの実力はいかに！？そしてカケルの武器の力とは！！？

それでは、またね～～

第九話 人は追い込まれると誰しも自棄になる

ああ、いったいなぜこんなことになってしまったのだろうか？

いったい俺が何をしたのだろうか？

そうだ。俺は何も悪くない、悪いのはあのイケメンだ！

あのイケメン野郎がいなければこの世界に来ることもなく平穏な生活を送ることができたはずなのに！

俺らは今全速力で逃げていた、そう、あの化け物・・・キングゴブリンから、

全長2mをゆうにこす体で俺たちを追いかける。

「なぜこうなったーーーー！！！！！！」

「まあまあ、これも運命なんだよ（ニコッ）」

「なぜこの状況を笑ってられる！？」

イシスは俺と違いニコニコ笑いながら逃げている。

だが、逃げているだけでは何も始まらない、とにかく攻撃をしてみようと思った。

「喰らえ!!」

俺は逃げながら短剣を投げつける、
しかし、短剣が当たったと思ったら弾いてしまった・・・奴の皮膚に、

「いやおかしいだろあの体!!」

「そうなのよねえ、あいつの体は鋼鉄よりも硬いらしいわよ」

依然としてイシスは平然を保っている。
ある意味尊敬にあいするものだった。

それにしてもあのでっかいゴブリンはずっと俺らを追ってきている。

「おいおいおい!真面目にどうする!」

「知らないわよ、あたしに振らないでよ」

「知らないってお前・・・」

「そうだ!ここは二手に逃げるのってどう?」

「二手に・・・か、確かに妙案である。」

幸い、町がある方向わかるので、帰り道はわかる。

「わかった、じゃあ町で・・・」

「ああ、ちょっと待って・・・おまじないかけてあげるから」

イシスはそういつと何かつぶやいた。

すると、カケルの周りに光が一瞬生まれた。

「これで、少し傷の治りが速くなるわよ」

「すまん、あんがとな、じゃあまたあとで！」

「ええ」

・・・なぜだろう、イシスの笑みが一瞬悪意に満ちていたような・・・

・

「なぜこうなった？」

そう、カケルは今絶望的な状況になっていた。

今カケルの周りにはゴブリンとキングな奴にとりこまれていた。

・・・もう一度言おう、

「なぜこうなった？」

『アハハ、主はやはりバカであるなアハハハハハ！！！』

アリスが高笑いをしている、なぜだろう、アリスと話すのが久しぶり・・・というか初めてのような？

・・・んなわきやないよな、いつも部屋の中で話してるし・・・たぶん

『主、さっきあの女に魔法をかけられたようだな』

「・・・受けましたが」

『あれは・・・敵寄せの呪いなのだけど？』

な・・・なんだって・・・！！！！！！

あ、あのアマ~~~~！！！！！！俺を・・・俺を売りやがったな！！！！！！！！

最初感じたあの殺気はマジ物だったか・・・くそが！！

なんだかめちやくちやくしゃくしゃしてきた・・・

「グウワアアア！！！！肉！！！！肉~~~~！！！！」

下っ端ゴブリン達が肉肉言っている。

カケルが切れるには申し分ない素材が、

ブチッ！！！！！！！

そろっていましたとさ（笑

「ちょうどいい・・・お前らを実験材料にしてやる・・・光栄に思うよなあ！？」

下っ端ゴブリン達が一瞬震え上がる、キングさんもなぜか身構える。

「クハハハハハ！！！！いいぜ！やってやろうじゃねーか！！」

すると、カケルは懷から自分の武器である二つの鉄扇を取り出した。

「指定する力は春・・・咲き乱れる・・・『佐保姫』！！！！」

そうカケルが言うと、鉄扇を開いた。

そしてカケルの周りに桜の葉が舞った！！

「死ねーーーー！！！！！！！！」

鉄扇を敵のほうに振ると桜の葉がゴブリン達に向かっていった。

困惑する下っ端ゴブリンは何も抵抗できずにその攻撃にあたり、傷だらけになって倒れた。

だが、キングのほうは何とか持ちこたえたようだ。

「はん！雑魚なら雑魚らしく、俺の経験値の糧になつてろ！！」

無論、この世界に経験値などは存在しない

「く力か力力力が、なるホド、な力な力やルではナいか」

「ハハハハハハ！！」

もう完全にトリップ状態のカケル・・・

『いいわゝ主、それでこそ主です・・・よっ最悪勇者』

「フハハハハハ！！！！もつと俺をたてまつれ！！ハハハハ！！！！」

片方の鉄扇を閉じながら笑いだすカケル、

・・・ほめているかどうか知らないがカケルは喜んでいるようだ。

「だが、我ヲ見くびるナ若造！！」

キングはそういつとすさまじいこぶしで攻撃してきた・・・が、

「甘いね!!」

カケルは片方の鉄扇でその攻撃を受け流し、そして、閉じておいたもう片方鉄扇で思い切り・・・首元を叩いた。

全長2mもあるのにどうやって叩いたかは思いっきりジャンプしたからだ。

「グヌヌ、なぜ痛みガ？」

そう、鋼鉄の皮膚をもつキングにダメージを与えたのだから奴は驚きを隠せない。

「冥土の土産に教えてやるぜ・・・この鉄扇はどんな奴でも『等しい』ダメージを与えることができるんだよ!!」

そう、実はこの鉄扇は内側に直接的に与える能力を持っているのだから、たとえドラゴンの皮膚だろうが、どんなかたい守りを固めるモンスターでも、ダメージを与えることができるのだ。

「さてと・・・そろそろ・・・死にやがれ!!」

カケルの周りにまた桜が舞い、それが一斉にキングを取り囲んだ。

「な、なんだ!？」

「・・・どんな花でも最後には散る運命・・・お前の命の花も散ら

してあげよう・・・」

「!？」

いきなり変なことを言うカケルに疑問を持つキング、

しかし、周りの桜はいまだキングの周りをまわっていた。

「ならばおまえの命ははかなく散らして見せよう・・・そう・・・桜」のように・・・」

その瞬間すべての桜がキングにまとわりつきそして最後には・・・

すべての桜がまた舞った時、キングゴブリンは絶命していた・・・

第九話 人は追い込まれると誰しも自棄になる（後書き）

はい！とんでもなく微妙な戦闘になりました・・・

戦闘模写がきらい・・・練習しなきゃ・・・

まあ、書いているとき、カケルが切れた時からハイテンションになつてしまい、

途中からひどい有様になつてしまったのが否めません・・・

そして極めつけはアリスです、性格は一応考えたんですが・・・そのまま出せているのかよくわかりません・・・

そしてお知らせですが、先週書けなかったので、来週は三回投稿したいと思っております。

日にちは火曜、木曜、日曜となる・・・はずです、はい

もしかしたら日にちがずれるかもしれませんが、必ず三回は書きたいと思っています。

それではまた次回お会いしましょう・・・それでは～

第十話 今の世の中・・・裏切りは常識（前書き）

なんやかんやで十話目突破！！

それになんと15000PV突破！！ユニークも3000突破！！

どれもこれも読者様のおかげです！！感謝しきれません・・・

これからは、今以上に頑張っていきたいです！！！！

第十話 今の世の中・・・裏切りは常識

俺は今ギルドの目の前にいる、そして、その中に目当ての人物がいる・・・

「・・・」

俺は無言で中に入り、その人物の前に出た。

「よう」

その人物はけらけら笑いながらカケルに言った。

「あれ？死んでなかったんだ、よくあいつら倒せたね、いや、良かったね、ほんとに」

「・・・」

カケルは怒りを通り越して呆れてしまい、椅子に座る。

「・・・金は？」

「ごめ～ん、もうてつきり死んだと思って～使っちゃいました～
～ヒック！」

どうやらこの人物・・・イシスは酒を飲んで酔っているようだ。

「何に使ったんだ？」

「えつとね〜、ギャンブルで〜全部〜負けて〜パアれ〜す」

カケルは真面目に呆れてしまい、話題を変える。

「なんで俺にあんなことをした？」

「え〜あんなことって〜？」

「とぼけるな、敵寄せの呪いのことだ」

呪いと話した時にイシスはピクツと反応した。

「それにあの呪いはかなり高位の魔術だと聞いたんだが？」

カケルはさらに追い打ちをかけた。

魔術にもランクがあり、それもまた上に行けばいくほど強くなっていくが、

扱いが難しく、使えるものも少なくなっていく。

しかも、呪い系の魔術は普通の魔術よりも扱いが難しくそれにより、さらに使えるものが少なくなっていく。

アリスの話だとこの呪いのランクは『B』である。

それによりこの女がEランクであることは・・・考えにくいことになる。

「・・・へえ、よくあれが敵寄せの呪いと気付いたね？」

「たまたまだ」

俺はもちろん、ほんのことをしゃべる気はさらさらない。

「ふふ・・・たまたま・・・ねえ？」

クスクスと笑い始めるイシスをじっと見つめるカケル、

やがてその笑いがおさまると、

グラヴィティー・オペレーション

「!？」

イシスは何かの『魔術』を唱えると、カケルは動けなくなってしま
う。

「はい、これであたしはもうあなたを殺すことは簡単よ？」

イシスは常人なら見ただけで動けなくなってしまうような目でカケ
ルを見つめた。

それにカケルは尋常じゃない殺気をイシスから感じた。

「・・・へえ、この状況でも怖気付かないんだ？」

イシスの言うとおり、カケルはこんな状況であるにもかかわらずイシスを睨みつけていた。

イシスはカケルのポケットから一本のナイフを抜き取るところだった

「これわかるでしょ？そう、ただのナイフよ、でもね、こんなんで
もあなたの命は簡単に・・・奪えるのよ？」

「・・・」

カケルはそれでも睨み続けている。

「・・・フッフ、おもしろいわね」

すると、ふっと殺気が消えて、カケルは自由に動けるようになっていた。

「本当にあなたは面白いわね、Eランクなのにキングゴブリンを倒しちゃうし、死にも怖気つかない・・・普通じゃ考えられないわよ？」

「そうかよ」

カケルはそれだけ言い返すと立ち上がり、どこかへ行こうとする。

「待ちなさい・・・これ、返すわ」

「!？」

イシスから渡されたのは自分の武器であるナイフと・・・鉄扇 佐保姫 であつた。

クスクスとイシスはまた笑いながら言った。

「面白い武器まで持つてるなんてねえ・・・あなた、いったい何者？」

「・・・ただの駆け出しの冒険者Aだ」

カケルはそれだけ言うと、受付に行き、違う依頼を受けてどこかへ行ってしまった。

「駆け出しの冒険者A・・・ねえ・・・フッフ、ほんとに何者なのかしら？」

イシスは何かを考え込むとまたクスクスと笑い、酒をまた飲んだ。

「あゝ首いてゝゝ、朝寝違えたのに、さらに余計な攻撃を・・・」

カケルはぼやきながら痛そうに首をさすっていた。

一文無しのカケルは今の状態でもできる簡単な依頼・・・木の実の採取をしていた。

それにしても・・・だ、

カケルは考えていた、あの女・・・イシスのことだ

先ほど使った グラヴィティー・オペレーション なる魔術は・・・
Aランクの魔術であったのだ。

しかも、アリスの話では・・・

『あの魔術はAランクの中でも最高の部類の魔術・・・Eランクの
冒険者が使えるはずがないです』

アリスにしてはかなり真面目に話していたのだ、なのでそれほど
ことだろう・・・

あのイシスってやつは・・・いったい何者なのだろうか？

まあ、今考えても意味はないだろう・・・おっと、これだこれだ。

カケルは目当ての木の实を見つけるとそれをいくつか採取して、依
頼主のもとへ急いだ・・・

第十話 今の世の中・・・裏切りは常識（後書き）

前書きに書いたと思いましたが、PVとユニークが大変なことに・・・
・本当にありがたいことです！！

今回はイシスとの絡みを書いてみましたが・・・どうだったでしょうか？

でもそろそろ、キャラクター紹介文書かないと・・・近日書きたい
と思います。

さて、それではこのへんで・・・またね～～

第十一話 仲間使えるやつを仲間にしたほうがいい

「さてと・・・これだけあればいいか」

城からの逃亡から三日がたち、カケルの準備が整った。

「よし、行くか」

カケルは冒険者たちが好んで買っているバッグを背負い、宿屋から出た。

・・・出たとたんだった。

「あら、おはよう！奇遇ね」

目の前にイシスがいたのだ、
あの最初の依頼から会っていないので二日ぶりだ。

「・・・何の用だ？」

「いゝえ、別に用ってわけじゃないけど・・・」

イシスはお金を入った袋をカケルに渡した。

「これは？」

「あたしがあんたの使っちゃったお金よ、その分入ってるから」

イシスはカケルのお金を返しに来たようだ。

「・・・それだけなら俺は行くぞ」

「へえ、この町出てくの？」

「それがどうした」

イシスは何かを考えるようにした後、こういった。

「じゃあ、あたしも行くわ」

「・・・・・・・・・・は・・・・・・・・・・？」

「なぜそうなる!？」

「だって、あたしもそろそろここから出てくところだったんだもん」

イシスは、けらけらと笑いながら杖をカケルのど元にいつの間にかあてて、

「否定は・・・認めないから」

「・・・いやだと言ったら？」

「も、わかってるくせに」

イシスは杖をカケルから離し、こういった。

「でも・・・あんたがあの勇者様だったなんてね」

「!？」

カケルはそれを聞くとはじけるかのようにイシスから離れた。

「なぜそれを？」

「いいじゃない、そんなこと」

「お前・・・いったい何だ？」

カケルはもつとも疑問に思ったことを口に出した。

イシスは自分の指輪を見せながらこういった。

「ただの冒険者Bよ?・・・フフフ」

イシスの笑みは周りの人間から見れば普通かもしれないが、カケルにとっては不気味に感じた・・・が、

「・・・笑えない冗談だ・・・」

「フフ、そうかしら？」

「ああ」

しばらくの沈黙が続いた後、カケルは言った。

「わかった、好きにしてくれ」

「はい、わかりました」

イシスは子供のように喜び、こう言った。

「じゃあ、さっさと行きましょ？」

「準備は？」

「もうできてるもん」

そういつてイシスは自分のバッグを見せた。

「・・・じゃあさっさと行くぞ」

「はいはい」

こうして、イシスは仲間になったが・・・かなりの謎が残った。

そうして、二人は近くにあるの町を目指していたが・・・

「なぜこうなったー！ー！ー！ー！」

「キヤハハハハ！！本当にあなたといると退屈しないわ〜」

「全然うれしくねー！ー！！！」

今カケル達は・・・狼みたいな魔物たちに追いかけていた。

この狼みたいな魔物の名は、【バイレントウルフ】といい、ランクはDランクで、

人間などを見つけるとその人間が息絶えるまで追い続けるほど執念深い魔物である。群れで動くことが多いらしい。

「でも、この数は異常だつて！！」

カケルが言うとおり群れといっても大体3〜4体程度なのだが・・・今追いかけている数は・・・だいたい20体もいたのだ。

「でもどうするの〜？このまま逃げてばかりいるの〜？」

「まさか」

そういつてカケルはポケットから煙玉を出し、火をつけてそれを後ろに投げた。

少しすると、ちょうど良くウルフたちにあたった。

「よし！今のう・・・」

「意味ないわよ〜？」

カケルが言い終わる前にイシスがそれを遮った。

それを理解するのに時間は必要なかった。

「ああ・・・なるほど・・・」

そう、ウルフたちは煙があるにもかかわらず一直線にカケル達に向かってきたのだ。

このウルフは鼻がよく聞くということを知らなかったカケルは、ウルフが一直線に來たのを見てすぐにわかった。

『グルルルルルル』

ウルフたちはすぐにカケル達を囲み、そして、攻撃態勢に入った。

「フフフ、あゝあ囲まれちゃったゝ、誰のせいゝかなゝゝ？」

「・・・はあ・・・」

イシスは愚痴りながら・・・とはいっても笑っているが・・・武器である杖をを構えた。

カケルは溜息をしながら両手に鉄扇を出して、構えた。

「でもいいわ、走るの疲れたしゝゝ・・・そろそろウザくなってきたしね、こいつら」

「あつそ」

カケルが言い終わるとウルフたちが襲いかかってきた・・・

スウロンド・ウォーター

イシスがそういうと大きな水の球体ができ、3体のウルフがその中に入った。

コンプレーション

イシスがその魔術を唱えると、水の球体が小さくなっていき、それに比例してウルフも小さくなり、最後にはそこには何もなくなってしまった。

「フフフ・・・あまり倒しがいいな〜」

イシス是不気味に笑い、今度は炎の球体を出してそれをウルフにつけた。

「咲き乱れる・・・ 佐保姫・・・」

カケルは鉄扇を振ると、桜がウルフたちに舞った。

「桜は舞い散る運命、それは命も同じ、舞い散らせ 舞散咲桜ぶさんしやうおつ・・・」

カケルががそういうと桜がくるくるとウルフたちの周りをまわった。すぐにウルフたちが桜によって見えなくなり、それがはれるとウルフたちは眠るように息絶えていた。

カケル達がウルフたちを全滅させるのに時間は・・・そう長くなかった・・・

第十一話 仲間は使えるやつを仲間にしたほうがいい（後書き）

最新遅くなりました。

色々あり、PCを触ることができませんでした。本当にすみません。

そしてやっとPCをつけてみると・・・なんとPVが20000を超え、しかもユニークが5000を超えてるではありませんか！！

本当に読者様に感謝感激であります・・・

それではまた次回お会いしましょう・・・それではっ

キャラクター紹介

名前・・・幾月翔　イクツキカケル

年齢・・・16歳

職業・・・高校一年生・元勇者補佐

体質・・・不孝体質

好き・・・平和　平凡

武器・・・鉄扇『佐保姫』　短剣

詳細

マコトの親友だが、彼が持ってくる厄介事にいつも巻き込まれている。

そのマコトが持ってくる厄介事を頑張ってやりすごしている間に少しばかり喧嘩が強くなった。

いつなん時に巻き込まれるかわからないので、いつも少し武装している。

母親が科学者のお陰で、何らかの物資をもらっているようだが・・・
父親は日本舞踊マニアで、色々とかケルに日本舞踊での戦い方を伝授されている。

現在は異世界に召還・・・もとい巻き込まれ、魔王を倒す羽目にな

った。

しかし、城から逃げてそれを回避できたが・・・

カケルの武器である鉄扇には特殊なものらしく、中には少女がいた。
名前はカケルがアリスと命名した。

この鉄扇は『春』の力を使うことができるらしく、カケルは桜を使
って戦っている。

だが、他にも力があるようだ。

名前・・・月森真 ツキモリマコト

年齢・・・16歳

職業・・・高校一年生・勇者

体質・・・フラグメーカー

好き・・・友情 努力

武器・・・聖剣

詳細

カケルとは親友関係で、よく厄介事に顔を出しては巻き込まれ、それにカケルを巻き込むがそれは無自覚である。

父親と母親は、どちらも有名な剣術家で、その剣術をマコトは受け継いでいる。

通称フラグメーカーとも言われていて、そのままの意味でよく女性に声をかけられる。

その理由として顔立ちがイケメン、頭脳明細、運動能力抜群と三拍子そろっているからである。

ただし、政治に関してはめっばう弱いらしい・・・

現在は異世界に召還され、勇者に命名された。今は修行中らしい。マコトの武器である聖剣の力は未知数である・・・

名前・・・イシス・グレーン

年齢・・・不詳

職業・・・魔術師

好き・・・ギャンブル 酒

武器・・・杖 魔術

詳細

Eランクの魔術師らしいが、Aランクの魔術を平然と使っている。

性格もふざけているかと思ったら、

いきなり殺そうとして来たりするほど掴むことができない。

現在はカケルと一緒に行動中だが、

カケルが召喚されたことを知っているなど、謎がかなり残る存在のようだ・・・

名前・・・クリス

年齢・・・秘密!!

職業・・・巫女

好き・・・マコト 料理

詳細

カケル達（主にマコト）を異世界に読んだ張本人で、マコトに目ぼれ。

カケルが邪魔でしょうがなかったらしく、いなくなって内心かなり喜んだらしい。

巫女になるために血のにじむような努力を重ねたらしいが、なぜ巫女になりたかったかは不明。

召還した後はマコトの身の回りの世話をしているらしい。

名前・・・レイ・グロウリー

年齢・・・不明

職業・・・王女

好き・・・マコト　グロウリーエターナル

詳細

グロウリーエターナルの王女様で、マコトを見て一目ぼれした。もちろん、カケルのことなど眼中にない。というか、いたことすら

おぼろげである。

王女ではあるが、剣術に自信があるらしく、
実力は一つの隊を全滅させるくらいあるらしい・・・

キャラクター紹介（後書き）

とりあえず書いてみました。

で、一回小説を見返してみたのですが・・・
なぜか、カケルの性格がおかしくなっているような？

気のせいと思いたいです・・・はい・・・

何とか脱線したものを直していけるよう努力します！！

それでは～

第十二話 大会があるらしいが俺には・・・何？金が出る！？

「・・・朝か・・・」

カケルは眠そうに眼をこすり、伸びをすると近くの湖で顔を洗った。

「あら、おはようかしら？」

「ういゝす」

こいつは俺と一緒にきた変な奴・・・イシスである。

彼女は魔術師で、ランクはEのはずだが、それ以上の実力を持っているのは確かである。

「それにしても野宿なんて久しぶりだわ、たまにはいいものよね」
「」

・・・本当につかめない奴だ、

「で、ここから一番近い町に向かっているのよね？」

「そうだが、何か問題でも？」

二人は各自の荷物をまとめながら話していた。

「うん、問題ではないけど面白いものが始まるのよ」

「面白いもの？」

カケルはいったん作業を止め、イシスのほうを向いた。

「ええ、なんか大会があるみたいよ」

「どんな大会だ？」

「武術大会よ、でも、魔法でもなんでもありみたいよ」

カケルはそれを聞くとまた作業を始めた。

「あれ？もしかして興味ない？」

「ああ、まったくないね、大体なんでそんな汗臭いことしなきゃならない？」

カケルは準備が整ったようので自分の荷物を担ぐと、

「賞金が出ても？」

「さあ！その街へさっさと行こうか！！」

「クスッ」

カケル達は夕暮れ時になってようやくその街に着いた。

「やっとだな・・・」

「そうかしら？それでも結構速く着いたほうよ？」

イシスはそういうと足早に町の中に入って行った。

「さつさと宿取らないとまた野宿になるわよ」

カケルはやれやれと言いながらイシスの後を追っていった。

「なぜこうなった・・・」

「キャハハハ！！カケちゃ～～ん！！もつと飲みなさいよ～～」

「いや、俺のは酒じゃな「ホラホラホラ！！」「ゲボハア！！」」

カケル達は今酒場にいた、当然荷物は宿に置いてきた。

まあ、もともとの酒場に来た理由はあったのだが・・・

『大会参加ですか？すみません、今回の大会はもう三人一組のもの
しかないのですが・・・』

まあ、ようは大会参加したかったが三人じゃないと無理らしい・・・

まあそれでイシスはヤケ飲みしてるのだが・・・とばかりがともじらないがキツイ

まあ、大会まで時間があるのでそれまでに見つければいいのだが・・・明日までらしい

「はああ・・・今回は諦めるしかないか？」

「いやよ～～あたしが出たいって言ったんだから出るの～～!!」

いや、そんな事言われても、そこら辺の奴を仲間にしても勝てるとは思ってないが・・・

「・・・こう言っちゃなんだがお前一人でも十分じゃ」「うるしゃ～～い!!」グボハア!!」

また酒を飲ませるのかと思いきや酒瓶で殴られたカケルは血を流しながら机に突っ伏した。

「キャハハハ!!カケちゃんよわ～～い～～!!」

「・・・ここはどこ?私は・・・誰?」

カケルにとっては災難な一日のようだった・・・

「・・・ハッ！！・・・何やら見てはいけない夢を見てしまったよ
うな・・・夢であってほしいな・・・」

カケルはどうやって帰ったかは分からないが昨日荷物を置いた宿で
眠っていた。

「頭がグラングランするが・・・二日酔い？いやいや、俺酒は・・・
飲まされたっけ？」

昨日の事があやふやになってきたカケルは頭を冷やすために外に出
た・・・

そう、出ただけだった、本当にそれだけだったはずだったのに・・・

「「「「「フアアアアアアアアア」」」」」

眠気があつて気付かなかったただけかもしれないが、外に出てすぐに
歓声が出た。

「何の騒ぎだよ・・・って何人いるんだよこれ・・・」

カケルはこの歓声が聞こえた所・・・町の中心当たりに来てみたら
数えきれないほどの人（人じゃない奴もいた）がいた。

「おい、これは何の騒ぎだ？」

カケルは目の前にいたおっさんに聞いてみた。

「あぁん？知らねえのか？勇者様だよ！勇者様！！今回の大会にも参加するらしいぜ！」

・・・なつてこつたいOTL

「・・・ええと、何に参加するのは？」

「三人一組のやつらしいぜ？」

・・・もう嫌だ、なんでつたつてこんなにも早く再開しそうになるんだよ！！

そつだ！今からでなけりゃ・・・

そこでカケルは昨日の出来事を思い出した・・・

『カケル～～参加するんだからもう書いとくよ～～』

『は？人数足りないじゃん』

『そこは大丈夫！明日までだつてさ、それでだめでも二人でもいいつてさ！！』

『ああ、そうそうこの大会には 棄権 はないみたいよ、審判が止めない限り続くみたいよ、まあ時間制限とかは・・・』

不運だあ~~~~~!!!!!!!!!!!!

なんだよそれ！それじゃあ、やめれないじゃん！！

いやだ！！そんなのは嫌だぞ俺は・・・

「フッフ」

ま、まさかこの女^{アマ}・・・

「知ってたのか？」

「当然よ？当たり前前の事聞かないでよ〜」

・・・

大会の火ぶたが落ちるのは少しずつ近づいていった・・・一人の悲鳴を聞きながら・・・

第十二話 大会があるらしいが俺には・・・何？金が出る！？（後書き）

最新遅れてすいませんでした、
学校やら部活やら家の仕事とか・・・まあ、いろいろ忙しかったの
です、

申し訳な言い持ちでいっぱいです・・・これから書いていきます
が、最新は遅くなるかもしれません。

でも、これは完結させる気はあるのでそこだけは期待してください
！！

感想などやアドバイスを下さるとうれしいです！
それでは、またね〜

第十三話 始まってしまった大会！もう後には戻れない！ 序章

「で、どうするんだ、これから？」

カケルは朝食を終えた後、宿でとった二階の自室に戻り、そこにいたイシスに聞いた。

「あら？意外とやる気になったの？」

「バカ言え、あいつらと戦う前でわざと負ければいいんだよ」

あいつらというのはカケルと一緒に来た（というか本来はカケルはいないのだが）マコトの事である。

「へえ、それまで勇者様に目をかけられなきゃいいわね〜？フフフ〜」

何考えてるのか本当にわからん奴だよ、まったく・・・

ま、人の事は言えないがな、

「そのことは言ったの置いておくとして、もう一人の仲間はどつするんだ？」

それを言われたイシスは少し考えるような姿勢になりながら言った。

「それについては・・・目星は付いたわ」

「ほう・・・どんな奴だ？」

イシスは鞆から一つの資料を取り出してそれをカケルに手渡した。

カケルはそれを読み上げる・・・

「メーゼル・ソル・マナ	18歳	男性	職業不明	B
ランク	幾多の依頼成功	期待の新人	っていくらなんでもや	
ばくないかこいつ？」				

カケルがどんな意味でヤバいかはイシスは聞かなくとも分かっていたが、

「それも重要だけど・・・一番下に書いてある奴を見てみなさい」

「一番下・・・？ 性格に難あり って、いやな予感しかないんだが？」

フツツとイシスは笑った後、

「多分近くにいると思うわよ？ ほら、外から声が聞こえるでしょ？ それに意外と顔立ちいいから一発でわかるわよ？」

カケルは耳をすませると、外から女性の甲高い声が・・・これ明らかに悲鳴ですね、

カケルはおそろおそろ窓を開けると・・・

「う~~~~~待ちたまえ~~~~美少女達よ~~~~!!!!!!
!!私の美しさに見とれすぎて逃げているのだろお~~~~!!
!!!!!!私はそれを広大な心でえ~~~~!!
!!!!!!許してあげるから~~~~!!さああ!!私の胸の中
へえええええ~~~~!!!!!!!!!!!!飛び
込んで・・・」

バンッ!とカケルは強めに窓を閉めてイシスに再確認してみた。

「えっと・・・マジで?」

「ええ、マジよ?なかなかユニークでしょ?」

カケルはそれを聞いて力が抜けたのか、ベットに倒れてしまった。

「アア、ソウデスネ、ユニークデスネ!」

カケルはそういうと決心したかのようにガバツと立ち上がる。

「どうしたの?」

「あいつに会ってくるだけだ」

「ならあたしも行こうかしらゝそろそろ悲鳴がつるさいゝ
グチャグチャニシテアゲル？」

・・・取り敢えず、マナさんご愁傷さまー（棒

「ん？何か寒気が・・・？そんなことより今は目の前のレディのこ
とが先決だ！！待ちたまえゝゝ！！」

「きゃーー！！こっちに来るなあーー！！！！！！」

「きもーーい！！！！！！」

「ハハハ！！そんなに照れなくてもいいだろゝゝ！！！！！！！！！！
！！！！！！さああ！！僕の胸の中へ・・・」

その後、メーゼル・ソル・マナこと、マナさんの死体ができるのに
時間はかからなかったとき、

第十三話 始まってしまった大会！もう後には戻れない！ 序章（後書き）

今回は短めに作りました、

え？マナはこれからも出るかって？ハイ出ます。

今回はマナの紹介てきな感じで作りました。

まあ、次あたりから大会が始まると思います、

それでは、まっ たねっ！！

お知らせ

長いこと最新できなくて済みませんでした。

弁解をするならば、この頃、部活の大会が近くなったため練習量が多くなり、書くことがままなくなっていました、

大会は11月に入ってすぐ終わるので、それが終わったら書くことと思います。

読者様には大変申し訳ありませんが、11月まで待ってくれるとありがたいです。

内容のほうはけっこう固まっているので終わったら早めに書けると思います。

それではこのへんで失礼させていただきます・・・それでは〜

第十四話 始まってしまった大会！もう後には戻れない！ 一章

時刻は夜、場所は宿での話・・・

「初めまして、私はマーゼル・ソル・マナというものです、今回はともに全力で戦いましょう！！」

「ああ、俺の名前は力・・・」

「うるわしのレディ・・・お名前は？」

・・・盛大に無視されたな・・・俺

「フフ・・・イシスよ、よろしくね、マナさん」

「『さん』なんてなど要りません、あなたの愛がほ・・・『ウィン・ブラスト』・・・ぐはあ！！」

マナはイシスの魔法で吹き飛んで、壁に打ち付けられた。

「・・・はあ、俺もう寝るわ・・・」

カケルはこの光景を見ても何とも思わず、そのままベットに入り寝てしまった。

「というわけで、大会ね！」

「・・・展開速くないか？」

「気にしな〜い」

「絶世の美女はどこだー！！！！？運命の姫様はいずこにー！！！！？」

カケル達は今その大会が行われる闘技場の前に来ていた。

勇者が出るとのことあつて凄いにぎわいのようだ。

「そっいゃ、この大会のルール聞いてないんだが？」

「だつて言つてないもん」

いや、さつさと教えてもらいたかつたんだが・・・

「まあ、私たちが出るのは三人一組の奴なのは知ってるでしょ？
その三人の力を合わせて優勝を目指しましよ〜、という子供
でも考えられる普通のルールよ、

トーナメント制で戦いについては相手が気絶か降参すれば勝ちよ、
といっても三人ともその状態にしなきゃだめだけどね？」

「・・・そんなものに俺は出なければいけないのかよ・・・」

『フフフ・・・主・・・いっぱい・・・い～～～ぱい遊べるねえ～
』

アリスマジ怖いわ！！こちとら死闘しなきゃいけないんだぞ！！

「・・・優勝すれば私は民たちの賞賛が・・・フフ・・・女性から
もこれで・・・」

拝啓、お父様お母様、元気にお過ごしでしょうか？

僕はたった今から・・・死ぬかもしれません（精神的な意味で

カケルは大きなため息をした後、一行は闘技場の中に入って行った。
・
・

【レディ~~~~ス・ア~~~~ンド・ジエントルマ~~~~ン!!!!こ
れよりこの武術大会を~~~~始めたいと思いま~~~~す!!!!!!
!!!!!!】

ワアアアアアアアアアアアアアア!!!!!!!!!!!!!!!!!!
!!!!!!

観客たちは大会が始まったことに対して大きな歓声と拍手をささげ
た・・・

ここから俺らの戦いが始まったんだー（遠い目

その後、勇者の講演会コトが始まった、ああ、ウザイウザイ

要約してまとめると『優勝目指して共に頑張ろう!!』である。

・・・優勝できるやつらなんて限られてんのかな、大概は強者しか
なれないんだよそんなもん、

そう、所詮はそうである、強者が勝ち、弱者が負ける・・・それが
『常識であり普通』だ。

それをくつがえそうなんて弱者はいやしない、理由は負けるのを知
っているからだ

いったい誰が負けるのを知って戦うのか？いったい誰が『そんなこ
と』のために必死になるのだろうか？

地位が欲しいから、それとも名声か、はたまた金か・・・生きるた
めか・・・

『そんなもの』のために人は頑張っている、それが『常識であり普
通』となっている。

弱者は弱者だ、努力をしても強者なんかになれるはずがない、挫折
していき弱者として生きていく。

強者は強者だ、努力をすれば強者になれる、さらに強い強者になっ

ていき、さらに向上しようとする。

弱者から強者になれるやつなんてほんの一握りである。

強者から弱者になる奴なんてそれこそ一握りである。

でも俺は努力して勉強もしたし、運動もしたし、友人をたくさん作ろうと思っていた・・・でも、

結局は強者^{マイト}にかなうことなんてない、でも、不思議と恨んだりすることができない自分が・・・ほんとに憎かった・・・

『・・・素晴らしいですわ主・・・私はそんな主を応援していきたいです・・・弱者である主のために・・・』

「・・・ル・・・カ・・・ケル・・・・・・カケルちゃ～～ん!!
!!!!!!!!!!!!!!」

「~~~~!!!!!!うるさいわ!!」

「だってカケちゃん反応しないんだも～～ん」

耳元で叫んだイシスは凄くうれしそうな表情で言った。

「なんでうれしそうなんだよ！！それとカケちゃん言っな！！！！」

「や～～だよ～～～～ん！！！！」

イシスはまたも嬉しそうに言いながら言った。

マナとは言つと・・・

「・・・エルフの女性確認！！これより突撃を・・・」

「突撃すんなあああああ！！！！！！！！！！」

「・・・計画は順調か？」

「はいはい・・・それはもう怖いくらい順調に・・・」

「我は失敗がきらいだ・・・必ず成功させる・・・」

「・・・それにしても手が早いんですね・・・」
『魔王様・・・』

第十四話 始まってしまった大会！もう後には戻れない！ 一章（後書き）

遅れてすみませんでしたあああああ！！！！！！！！！！

大会が・・・いい成績見たくて・・・県大会がああああ！！！！！！！！！！

来週はそのリハーサルがあああ！！！！！！！！再来週は本番があああ！！！！！！！！

・・・コホン、ともかく遅れてしまい申し訳ありませんでした。

上に書いたとおり、県大会が近くなっており、かなり忙しいです、はい

でも、一生懸命頑張る所存なので、こんな駄文ですが待つて下さると幸いです。

今回は久しぶりに描いたので感覚が鈍ってるかも・・・アドバイスください!!後、感想くれたら嬉しいな...

ちよつとずうずうしいかもしれませんが、出来れば感想が欲しいです・・・

それでは・・・まっ
たねっ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8443/>

天才でイケメンでハーレム野郎な勇者と平凡で不幸で卑怯な親友で主人公(仮)

2010年11月13日23時00分発行